

学位論文要旨

中国山東省における大学生
のキャリア意識に関する研究

広島大学大学院人間社会科学研究科

教育科学専攻 教育学プログラム

教育学コース

D203011 成 倩倩

I.論文題目

中国山東省における大学生のキャリア意識に関する研究

II.論文構成

序章 研究の目的

- 第1節 問題の所在
- 第2節 キャリア意識研究の動向と課題
- 第3節 本研究の目的

第1章 大学生就職問題をめぐる政策の動向

- 第1節 問題の所在
- 第2節 就職指導政策の導入と発展
- 第3節 現在の状況
- 第4節 政策の限界

第2章 大学生のキャリア意識研究の射程

- 第1節 キャリア意識研究の意義
- 第2節 中国でのキャリア意識研究
- 第3節 日本でのキャリア意識研究
- 第4節 本研究の検討課題

第3章 調査の概要

- 第1節 山東省の社会的背景
- 第2節 調査対象校の概要
- 第3節 学生の出身階層
- 第4節 大学での学習生活
- 第5節 まとめ

第4章 キャリア意識の現状

- 第1節 問題の所在
- 第2節 キャリア意識の実態
- 第3節 キャリア意識の背景
- 第4節 大学類型別の特徴
- 第5節 まとめ

第5章 大学ランクによる違い

- 第1節 問題の所在
- 第2節 出身階層の影響
- 第3節 「寝そべり主義」の流行
- 第4節 就職志望の要因
- 第5節 まとめと考察

第6章 地域による違い

- 第1節 問題の所在
- 第2節 上昇移動のための進学
- 第3節 「インボリューション」の顕在化
- 第4節 能動的なキャリア形成
- 第5節 まとめと考察

第7章 学生から見たキャリア支援

- 第1節 問題の所在
- 第2節 学生による認識—理論重視
- 第3節 大学による取り組み
- 第4節 大学ランクによるニーズの分化
- 第5節 まとめと考察

終章 まとめと考察

- 第1節 結果の要約
- 第2節 考察

III.論文要旨

序章 問題の所在

本研究の目的は、中国の学生のキャリア意識が、大学類型によっていかに異なるのかを明らかにすることである。事例として、中国の山東省¹に焦点を当てる。中国では長期にわたり「大学に入学さえすれば将来のキャリアが保証される」と考えられてきた。しかし、1990年代の「高等教育の大衆化」による大学卒業生の急増により、中国の労働市場、社会構造、また雇用を取り巻く社会環境が大きく変化し、「大学進学=将来のキャリアの保証」という認識が揺らぐようになった(李 2011)。新聞や雑誌は「大学生過剰」「読書無用」(字を知っていても金は稼げない)という論調であふれている。

こうした問題の深刻さを認識し、中国政府は大学でのキャリア支援によって就職問題を解決しようとしている。2007年「大学生職業発展与就業指導課程教学要求」では、就職指導カリキュラムを正式に導入することが強調された。2014年国務院は、4年制大学の職業教育を発展させ、合理的な職業教育システムを形成することを提示した。一方、大学側は、こうした政策に応じるため、カリキュラムにキャリア教育を組み込み、産学連携など職業との連続性を取り入れることで学生の就職問題の

¹ 中国の行政区分は省級(第一級行政区:直轄市、特別行政区、自自治区を含む)、地級(第二級行政区:地級市、区など含む)、県級(第三級行政区:市轄区、自治県を含む)、郷級(第四級行政区:鎮、街道などを含む)の4段階である。つまり、省>市>県>鎮>村となる。

解決を促進しようとしている。このように、中国政府や大学は、キャリア支援・教育の「改革」によって学生の就職問題に取り組もうとしている。

こうした背景のもとで学生の就職問題を軸に関連する研究が行われてきた。先行研究を概観すると、1990年代から就職事情の悪化を問題意識として、学生のキャリア意識を論ずる研究が蓄積されてきた。

これらの研究により学生のキャリア意識形成のメカニズムとキャリア支援の改善策を把握する点では一定の示唆を与えられる。しかし、中国の学生のキャリア意識研究には、依然として大きく次の4点の課題が残されている。

第1に、実証的な研究に限られている。第2に、学生の多様性が考慮されていない。第3に、大学院進学希望者の検討が不十分である。第4に、学生の視点からキャリアに関するニーズ、すなわち大学によるキャリア支援が検討されていない。以上を踏まえ、本研究では山東省を事例に、地方における学生のキャリア意識を明らかにするとともに、異なる種類の大学で学生のキャリア意識がいかに異なるのかを検討したい。また、その結果をもとに、学生のニーズを反映させるキャリア支援策を支える実証的な根拠を提供したい。

これらの目的を達成するため、本論文では次のような課題を設定する。第1に、実証的な調査に基づき学生のキャリア意識の実態を明らかにする。第2に、地方大学生に着目して、大学類型によるキャリア意識の差異とその規定要因を明らかにする。第3に、大学院進学希望者を対象とし、学生の大学院進学希望の要因、また、大学院修了後の就職希望などを含む学生のキャリア意識を検討する。第4に、学生の大学でのキャリア支援に対する認識や評価を検討することで、学生のキャリア形成に関するニーズを明らかにする。これら四つの研究課題に取り組むことで、中国の学生のキャリア意識を多面的に明らかにしたい。

第1章 大学生就職問題をめぐる政策の動向

本章では、中国での学生の就職問題をめぐり政府により提出された政策の変遷を概観した。中国の就職問題に最初に関心を持ったのは研究者であった。政府は研究者の指摘を受けて就職問題に注目するようになり、一連の取り組みを始めたのは1990年代に入ってからであった。当初の政策は就職率の向上により問題解決を図ろうとするものであったが、その後、大学でのキャリア支援の徹底へとシフトしている。

現在、中国政府は大学でのキャリア支援を重視し、キャリア教育を推進するよう求めている。つまり、現在の就職問題は大学、および、学生の問題だとされている。また、これまでの政策は、外国の経験を参考にしながら、大まかな方針のみが理念的に示されているに過ぎない。大学と学生の実情に適応する具体的な政策が十分に示されたとは言えない。まず、学生のキャリア意識の実態を把握し、学生のニーズ

を実情に沿って明らかにすることが求められる。

第2章 大学生のキャリア意識研究の射程

本章では、学生のキャリア意識に関する中日の先行研究を整理することでその到達点を示し、本研究の課題を提示した。結論を先取りすれば、中国の学生のキャリア意識に関する研究は、大まかにマクロな視点、ミクロな視点、および両者を接合した高等教育機関、とくに学生の研究という三つの視点にまとめられる。また、日本の先行研究の視点や研究方法と比較すると、中国の先行研究では大学や学生の多様性が考慮されていないことが重要な課題である。

まず、マクロな視点に基づく研究では、就職状況と就職制度が学生のキャリア意識と関連することが指摘されていた。不景気や厳しい就職状況などが学生のキャリア意識にマイナスの影響を与え、卒業後に就職を希望しない学生が増加する傾向がある。一方、就職に関する制度の充実は、就職志向や将来のキャリアに対する意識にプラスの影響を与えているとされる。次にミクロな視点に基づく研究では属性や家庭背景など個人的な要因が学生のキャリア意識に影響を与えることが指摘された。家庭環境に恵まれ、女性、文系の学生は卒業後大学院への進学を希望する傾向がある。また、出身階層が高いことは学生のキャリア意識にプラスの影響を与えるとされる。最後に、高等教育機関を中心とした研究では、キャリア意識と大学ランク、大学でのキャリア教育との関わりが検討されていた。大学ランクが上位でキャリア支援が充実していることが、学生のキャリア意識にプラスの影響を与えるとされる。ただし、研究対象は大学ランクの上位校であり、ランクによるキャリア意識の違いが十分に検討されているとは言えない。

以上のような中国の先行研究の課題を、日本の先行研究と比較しながらまとめれば、大きく次の4点になる。

第1に、実証的な研究が限られている。先行研究の多くは、理念的な議論に留まっており、実証的に学生のキャリア意識を調査した研究の蓄積が十分であるとは言えない。第2に、学生の多様性が考慮されていない。中国での研究は、非重点大学や地方にある大学の学生に十分な関心が向けられていなかった。第3に、大学院進学希望者の検討が欠けている。多くの先行研究が大学院進学希望者の増加を指摘するにとどまっており（例えば、鄧 2012、魏 2020 など）、その要因が十分に実証的に検討されていない。第4に、学生の視点から見たキャリア形成に関するニーズ、すなわち大学によるキャリア支援が検討されていない。これまでの研究では政府や大学の立場から支援策が検討されており、実際の学生のニーズが十分に検討されてこなかった。

第3章 調査の概要

本章では、調査の概要について整理した。調査対象となった大学の概要は次の通りである。本研究で分析するアンケート調査は、2021年3月2日から3月20日にかけて、中国の山東省にあるA大学、B大学、C大学、D大学、E大学という五つの大学で、1,456名の学生を対象として実施した。

また、調査したデータは、女性、2年生に少し偏り、4年生が少ない。中国では大学4年生になると、就職や進学等に迫られ、大学を離れる者が多いため、4年生の調査が困難だった。専門については、文科系の学生に偏っていた。

また、学生の出身階層を、出身地域、親の学歴・職業などから検討した。その結果、学生の多くは都市部出身で、両親は中等教育以上の学歴を持ち、両親の職業の社会地位は中位以上であることがわかった。このことから、今回の調査対象者は社会階層中層以上の出身者が多いことになる。

学生の学習状況をみると勉強中心であり、娯楽にはあまり関心を持っていないことがわかる。進路やキャリアに関する勉強に積極的であり、とくに専門の授業に関連する学習に強い関心を持っていた。

第4章 キャリア意識の現状

本章では、単純集計にもとづき、学生のキャリア意識を検討した。その結果、学生は以前とは異なるキャリア意識を持っており、雇用されるのではなく、起業や自営などに関心を持っている者が多いことがわかった。また、将来の就職に向けて積極的に準備しているが、関連する情報が欠けている。分析結果の詳細は以下の通りである。

第一に、多くの学生は明確なキャリア意識を持っており、将来のキャリア計画を立てている。ほぼ9割の学生は卒業後の進路を決めており、自らのキャリアを強く意識していた。また、7割以上の学生が将来のキャリア計画を立てていると回答していた。

第二に、従来とは異なるキャリア意識が見られた。もちろん、大学院への進学や公的セクター²・大都市での就職を希望する者は依然として多い。一方、自由業（起業・自営）・専門職という雇用関係に束縛されない職業、と中小都市での就職を希望する学生も少なくない。

第三に、学生には就職活動に関連する情報が十分に与えられていない。8割以上の学生が、仕事の内容を重視し、将来の就職先から知識や技術を学びたいと考えている。だが、就職活動の方法を理解しているとする学生は3割にすぎない。つまり、

² 制度内とは、中国政府に管理される就職先を指す。おもに、公務員や国有機関での仕事を指す。

就職に関する情報が不十分である。

第5章 大学ランクによる違い

本章では、大学ランクによる学生のキャリア意識の差異を検討した。その結果、とくに卒業後の就職希望に、大学ランク間で大きな差異がみられた。つまり、大学ランクが高いほど、学生は高い社会的地位を求め、将来の就職のため積極的に準備し、卒業直後の就職を希望する者が多い。

また、地方重点大学の学生で卒業時の就職意識が低いのは、いわゆる「学歴ロンダリング」によると考えられる。本研究で山東省を事例に学生の意識を調査した結果、山東省の大学では多くの学生（6割）、とくに地方重点大学の学生は学部卒業後の進学を希望し、すぐには労働市場への参入を希望していないことが明らかになった。良い仕事を得るためには、高学歴が要求される。学生は自身の学歴を書き換えることで厳しい就職競争に勝ち残ろうとしている。これが地方重点大学の学生が就職より進学を希望する理由である。浦田（2010）が指摘しているように、就職の失敗を回避するため、学生は大学院進学を希望する。地方重点大学出身の学生は就職市場において全国重点大学ほど有利な立場ではなく、全国重点大学の卒業生との競争に勝つことは出来ない。つまり、地方重点大学出身者の進学行動はアカデミックな志向ではなく、むしろ、強い就職意識の結果だと言えよう。

第6章 地域による違い

本章では、山東省内で地域による学生のキャリア意識の差異を検討した。分析の結果、同じ山東省でも地域により学生のキャリア意識は異なっており、とくに、「地方中心都市」（省の経済と文化の中心となる都市。それ以外の都市を「地方周辺都市」と呼ぶ）の学生ほど大学院への進学志向が強くなり、社会的地位が高いキャリアを求めている。

以上の結果からとくに、地方中心都市大学の学生は大都市への進学により、高い学歴と将来の高い社会的地位を実現しようとしていることが明らかになった。こうした事象はシグナリング仮説で次のように説明できよう。中心都市の非国家重点大学の学生にとって、学歴は満足のいくシグナルではなくなっている。中国では、公的セクターの職業は社会的ステイタスが非常に高く、その地位をめぐる競争は激しい。重点大学卒というシグナルは公的セクターをめぐる就職で有利になる一方、地方大学卒というシグナルでは競争を勝ち抜けないと考えられている。したがって、地方重点大学の卒業生は就職をめぐる競争に勝ち抜くため有利なシグナルを得て自身の序列を上げるため、大都市部にある名門校の大学院に進学することを志向することになる。一方、地方の周辺都市大学の卒業生は、すでにこうした社会的地位の高い職業をめぐる競争からは降りている。そのため、大学院への進学希望者は少なく、起業や自営などの学歴を必要としない仕事を希望している。

第7章 学生から見たキャリア支援

本章では、学生の視点から見たキャリアに関するニーズ、つまり、大学によるキャリア支援の状況を検討した。その結果、総体的に学生は大学でのキャリア支援に対する利用度が低く、その効果をあまり評価していないことが明らかになった。また、大学ランクが低いほど、学生の利用度とその効果に対する評価が低くなっていた。全国重点大学の学生は就職や卒業後のキャリア形成に対する支援を求めている。地方重点大学の学生は進学に関する指導を求めている。地方非重点大学の学生は就職に対するキャリア支援を求めている。

また、大学類型によってキャリア支援に対する学生の意識が分化しているのは、大学の社会的位置づけの違いが重要な要因の一つであると考えられる。中国のいわゆる深刻な学歴社会、つまり、大学が難易度によって序列化されていることがキャリア支援に対する意識が分化する要因になっている。

終章 結論と本研究の意義

終章では、学生のキャリア意識が大学類型によっていかに異なるのか、という本研究の議論を総括し、主要な知見と本研究の意義、今後の課題を提示した。以下では、学生のこのようなキャリア意識が、中国の社会・政策及び高等教育研究に対してどのような意味を持つのかを考察したい。

第一に、先行研究で検討されなかった、大学類型による学生のキャリア意識が異なることを実証的に検証した。第二に、新たな研究の視点により中国の高等教育研究の課題を提示した。本研究により、大学類型により学生のキャリア意識が大きく異なっていることを明らかにした。重点大学の学生は卒業直後に就職を希望するとともに、長いスパンで自身のキャリアを計画している。また、地方の中心都市の学生は、大学院への進学意識が高く、学歴の獲得により高い社会的地位を実現しようとしている。第三に、大学生のキャリア意識形成のメカニズムは、シグナリング理論の観点から解釈できることを明らかにした。第四に、大学による支援策の改善に一定の示唆を与えられることである。

IV.主要引用参考文献

鮑威・張倩, 2009, 「拈招后我国研究生入学選択的実証研究」『復旦教育論壇』第七卷, 第5期, pp. 5-11.

藤村正司, 2014, 「地方国立大学の役割と地域社会：再考有識者と自治体から見た長崎大学の社会貢献調査結果の概要」, 報告書：地域における国立大学の役割

- に関する調査研究—4 県有識者・自治体と 2 県住民調査の結果から—」『国立大学協会政策研究所報告書』, pp.1-182.
- 高静, 2011, 「中国における大学生の就職意識」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部, 第 60 号, pp.73-82.
- 本田由紀, 2001, 「社会人教育の現状と課題—修士課程を中心に—」『高等教育研究』第 4 集, pp. 93-112.
- 本田由紀, 2003, 『社会人大学院修了者の職業キャリアと大学院教育のレリバンス: 社会科学系修士課程 (MBA を含む) に注目して』, 東京大学社会科学研究所.
- 本田由紀・筒井美紀, 2006, 『仕事と若者』日本図書センター.
- 黄福濤・李敏, 2009, 「中国における大学院教育—制度の成立, 量的拡大と多様化」『大学院教育の現状と課題』広島大学高等教育研究開発センター, pp.81-100.
- 九門大士, 2020, 「中国人大学生のキャリア意識と中国大学に求められるキャリア教育—大連外国語大学との日中共同アンケート調査の分析」『アジア研究所紀要』第 46 号, pp. 53-77.
- 李敏, 2011, 『中国高等教育の拡大と大卒者就職問題』広島大学出版会年.
- 李春玲, 2012, 「80 後大学卒業生就業状況及影響因素分析—基于 6 所高校卒業生的調査」『江蘇社会科学』第 3 期, pp.45-53.
- 李敏, 2006, 「中国の大卒者進路選択及び就職に関する階層差の実証研究—上海を事例として」『教育社会学研究』第 78 集, pp.257-278.
- 麦可思研究院 編, 2019, 「2019 年中国本科生就業報告 (就業蘭皮書)」, 社会科学文献出版社.
- 岡尊涛・陳云松・王修曉, 2018, 「大学生卒業意向的影響机制及変遷趨勢」『社会』pp.182-213.
- 牧野智和, 2012, 「大学生の進路志望の分化に関する—考察—進路分化の『軌道』という視点」『早稲田教育評論』 26 巻第 1 号, pp.73-90.
- 西本佳代, 2008, 「大学生の学習行動に及ぼす就職意識の影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第 3 部第 57 号, pp.125-132.
- 王傑, 2005, 「学部生の進路志向における家庭的背景の影響」『教育社会学研究』第 76 集, pp. 245-263.
- 王伯慶・陳永紅, 2019, 『2019 年中国本科生就業報告 (就業蘭皮書)』麦克斯研究院社会科学文献出版社.
- 山田浩之, 1998, 「彦根高等商業学校生の社会的属性—地方高等商業學校の社会的機能」『松山大学論集』第 10 巻 1 号, pp.147-165.
- 山田浩之, 2003, 「地方私立大学における新入生の学習志向」広島大学大学院教育学研究科教育社会学研究室『教育社会学研究年報』第 6 号, pp.1-16.

- 山田浩之・葛城浩一編，2007，『現代大学生の学習行動』（高等教育研究業書 90）広島大学高等教育研究開発センター。
- 山田浩之，2009，「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部，第 58 号，pp.27-35.
- 吉田文，2014，『「再」取得学歴を問う—専門職大学院の教育と学習』，東信堂。
- 吉田文，2018，「高等教育の拡大と学生の多様化」『高等教育研究』第 21 集，pp.11-37.
- 吉田文，2020，『文系大学院をめぐるトリレンマ—大学院・修了者・労働市場をめぐる国際比較』，玉川大学出版部。
- 鄭潔 2004 「家庭社会経済地位与大学生就業一个社会資本的視角」『北京師範大学』第 3 期 pp.111-118.